

ゆくのき通信 第 10 号 2012 年 9 月



目次

京都大学理学部植物園の温室から	篠原 渉	2
あれから 1 年—今ふりかえってみて—	影山貴子 + 久松ユリ	4
影山さんに宛てたメールから	寺田晶英	5
思い出の京大植物園	坂崎信之	7
編集後記		20

表紙画 寺田 晶英

シンボルイラスト かじわられいこ

京都大学理学部植物園の温室から

篠原 渉

香川大学教育学部講師

京都大学理学部植物園には大きい温室と小さい温室がそれぞれ 2 つずつあります。私はこれらのうち、大きい温室 2 つと小さい温室のひとつを使用して研究したことがあります。最近では、理学部植物園の温室を最もよく使用した人間のうちのひとりかもしれません。ここでは 2 つの大きい温室にまつわる私の研究の体験談を書きましょう。

大きい温室はひとつが比較的新しく、もうひとつはボロです。植物園の入口からは、奥に新しい温室が、手前にボロの温室があります。大きい温室の新しいほうは、気密性が高く、暖房設備が機能しており、冬でもあたたかい状態で植物を栽培することができます。網戸もあるため、窓を開けていてもハチなどの昆虫が侵入してくることはありません。一方で、ボロのほうはというと、窓を閉めてもどこからか隙間風が吹いてきます。暖房も壊れているため、冬の曇っている日の温室の気温は外とほとんどかわりません。網戸がないため、窓を開けておくとノラ猫が侵入して、育てている植物の鉢の上で昼寝をしていたりします。

これらの温室では、理学研究科に所属する研究者の研究材料となる植物が栽培されています。また過去に理学研究科に在籍していた研究者が採集した貴重な植物も栽培されています。例えばシダ植物では、世界各地から採取されたシダ植物種、タイプ標本の生株や珍しい組み合わせの自然雑種などが栽培されています。シダが栽培されている温室に入ると、むっとした湿気とともにヘゴやリ

ュウビンタイ、オオタニワタリなど、大型のシダ植物の強い青が目飛びこんできて、一瞬、熱帯の森に迷い込んだかのような錯覚を覚えます。私はこのシダ温室の異空間のような雰囲気が好きで、大学院生の頃は実験に疲れた時などに、シダ温室でしばらくボーっとしてリフレッシュしたものでした。

はじめに植物園の入口からは奥にある新しい温室での話をしましょう。私が京都大学理学研究科の大学院に入学してまず利用したのが、この新しいほうの大型温室でした。大学院に入学当初の私はナチシケシダというシダ植物の染色体数と形態形質との関係に興味をもっていました。分類学の世界では、しばしばよくわからない個体をまとめておく「ゴミ箱」的な分類群が存在します。ナチシケシダはまさに「ゴミ箱」的な種でした。そのため葉の形質に変異が大きく、その中には複数の生物学的種が含まれている可能性があったのです(写真 1)。



写真 1: ナチシケシダの葉型変異の例。どちらも胞子葉をつけた成熟個体。

ところでシダ植物では種内倍数性といって、同一種の中に異なる倍数性をもつ個体が含まれることが知られています。そして倍数性の違いはしばしば形態形質の差異を伴っています。そこで私はまず倍数性を切り口にナチシケシダの葉の形質の

変異を調べることにしました。染色体を調べるためには、植物を栽培して「生きのよい根」や「今まさに減数分裂している胞子のう」を採取する必要があります。そのため染色体数を調べたい植物を大量に採集し、理学部植物園の温室で栽培しては、タイミングを見計らって染色体を観察するという作業を繰り返しました。研究にはいろいろと紆余曲折がありましたが、結局ナチシケシダの種内には2倍体、4倍体、5倍体、6倍体と複数の倍数体がみられ、倍数体と形態形質との対応がみられることがわかりました。そして複数の異なる種がいまままでのナチシケシダには含まれていることを明らかにしました (Shinohara et al. 2003; 2006a)。この研究がきっかけで、染色体の観察をベースとした研究をするようになり、その後のマレーホウビシダやヤブソテツ類の倍数性が絡んだ無配生殖種の種分化研究 (篠原 2012; Otsuki et al. 2011) や、ノキシノブの異数体の進化の研究 (Shinohara et al. 2010)、シケシダ類の新しい2倍体種の発見 (Shinohara et al. 2006b) や同倍数性雑種の研究 (Shinohara et al. unpublished data) などにつながりました。これらの研究もすべて理学部植物園の温室を利用したものです。

次はボロの温室でおこなった研究の話をしてしましよう。大学院を卒業した私は屋久島の高山性ミニチュア植物に興味をもちました。屋久島の高山性ミニチュア植物は祖先種から分化してからの時間が短く、元となった祖先種も現存しているため適応進化の研究材料として優れていると思ったからです。屋久島の高山性ミニチュア植物の中から、集団数が多く、世代時間が短いヒメコナスビを用いて、祖先種であるコナスビと比較することにしました (写真2)。



写真 2: ヒメコナスビ (左) とコナスビ (右)。スケールがはいついていないが、ヒメコナスビとコナスビの花の大きさはほぼ同じである。そのためヒメコナスビのほうが葉が小さいことがわかる。

集団数が多いと定量的な比較が可能であるため、データに説得力が増します。また例えば小型化遺伝子を同定する場合、ヒメコナスビとコナスビを掛け合わせて F2 (第2世代) 集団を作成する必要がありますが、その場合に世代時間が短くないと実験に時間がかかるのです。野外集団での形態形質の差異を一通り調べた私は (Shinohara et al. 2006c)、野外集団でみられた形質の差異が遺伝的バックグラウンドをもつかどうかを明らかにしたいと考えていました。ちょうどその頃、理学研究科の大学院に進学した掛澤明弘君 (現: 理学研究科博士課程 2年) がヒメコナスビの適応進化の研究に興味をもってくれました。そこで彼と一緒に共通圃場実験を始めることにしました。共通圃場実験は多数の個体を同一条件で栽培し、定量的に形質の差異を調べる方法です。同一条件下で栽培するため、形質に差異がみられれば、その差異には遺伝的バックグラウンドが存在することを意味します。この共通圃場実験の舞台となったのがボロの温室でした (写真3)。共通圃場実験では栽培の条件をそろえる必要があるため、すべての鉢で水やりの時間を一定にしたり、形質の測定も全個体をできるかぎり同時におこなう必要があります。全部で鉢が約 800 個あったので、毎日の水やりだけでも一苦労でした。



写真 3: 共通圃場実験を開始するために、寒天培地からポットにヒメコナスビを移植している様子。右が筆者。

ましてや形質を測定する日は二人で早朝から夜遅くまで温室にこもって測定しました。今となつてはよい思い出ですが、当時は形質を測定する日は大学にでかけるのが憂鬱だったのを覚えています。苦勞の甲斐あって、共通圃場実験は成功し、掛澤君の修士課程のメインの仕事になりました。現在のボロ温室では、掛澤君がヒメコナスビ以外の屋久島の高山性ミニチュア植物の共通圃場実験に取り組んでいます。今後も理学部植物園の温室を利用した素晴らしい研究成果が次々と生み出されることを期待しています。

参考文献

- Shinohara, W., M. Takamiya and N. Murakami. (2003) Taxonomic study of Japanese *Deparia petersenii* (Woodsiaceae) based on cytological and molecular information. *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica* 54. pp. 137-148.
- Shinohara, W., T. W. Hsu, S. J. Moore and N. Murakami. (2006a) Genetic study of the newly found diploid cytotype of *Deparia petersenii* (Woodsiaceae: Pteridophyta): Evidence for multiple origins of the tetraploid. *International Journal of Plant Science* 167. pp. 299-309.
- Shinohara, W., T. W. Hsu, S. J. Moore, H. M. Chang and N. Murakami. (2006b) *Deparia longipes* (Woodsiaceae) Native to Taiwan. *American Fern Journal* 96. pp. 96-99.
- Shinohara, W. and N. Murakami. (2006c) How have the alpine dwarf plants in Yakushima been miniaturized?: A comparative study of two alpine dwarf plants in

Yakushima, *Blechnum niponicum* (Blechnaceae) and *Lysimachia japonica* (Primulaceae). *Journal of Plant Research* 119. pp. 571-580.

Shinohara, W., Y. Ushio, A. Seo, N. Nakato, M. Kono, H. Kudoh, H. Tobe and N. Murakami. (2010) Evidence for hybrid origin and segmental allopolyploidy in eutetraploid and aneutetraploid in *Lepisorus thunbergianus* (Polypodiaceae). *Systematic botany* 35 (1). pp. 1-10.

Ootsuki, R., W. Shinohara, T. Suzuki, N. Murakami. (2011) Genetic variation in the apogamous fern *Cyrtomium fortunei* (Dryopteridaceae). *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica* 62. pp. 1-14.

篠原 渉. (2012) 有性と無性を組み合わせて多様性を維持するシダ. 中村桂子編 季刊 生命誌『編む』.

あれから1年—今ふりかえってみて—

影山 貴子

京都大学理学部生物科学図書室元職員

久松 ユリ

京都大学理学部生物科学図書室職員

昨年7月に100回目の観察会を終えて1年が経ちました。京大植物園90年の歴史の中で、京大植物園を考える会は僅かな期間関わったに過ぎません。植物園のほんの一部を覗き見ただけです。しかしその短い間に、植物園は様々な人々との出会いをもたらし、様々な事を教えてくれました。最初の植物園を守りたいという気負った気持ちが、いつしか植物園に包み込まれているという気持ちに変わっていることに気がきました。植物園はこれからも季節の移り変わりを見せ続けてくれるでしょう。

今年もユクノキは静かに美しく開花しました。見事に咲いたユクノキを見上げながら、来年も必ず会いに来ることを約束しました。黙っていても、きっと待っていてくれるのが植物園です。これか

らも四季折々に訪れてみたいと思っています。皆さんもぜひお出かけください。



写真：開花中のユクノキとメタセコイア

影山さんに宛てたメールから

寺田 晶英

2011年7月22日（金曜日）

こんばんは。昨日の100回を区切りとした観察会ですが、満を持したものだということですが、天気も幸いし、また参加者も多く、盛会だった様子で良かったですね。お疲れ様でした。ともかくも終わられて、ほっとされたことと思います。また今日は中日新聞の記事を送って頂きましたが、なかなか好意的にまとめられていて、新聞記事らしい文体ですけども、爽快感というか清潔感を感じさせる良い記事でした。良い取り組みを長い間聞かされてきましたね。改めてお疲れ様でした。

観察会のこの後の取り組みに付いての、私なりの意見ですが、これまでも大筋はお話して来ましたが、大きな方向性については私も賛成しています。それで付け加えるとすれば、「理学部 社会連携室¹」の働きになりますが、これはこれまで闘ってきた

¹ 社会連携室：現在の京都大学理学研究科学術推進部社会交流室。2011年4月に理学研究科・社会連携室が組織された。京大植物園を考える会からは理学研究科主催の観察会を申し入れた。

と言いますか、意志的な抵抗をしてきた「考える会」から見ますと、もとより「当局側」の訳ですから、今後ともどういう動きをするのか私には良く予測出来ません。また、大学が「植物園（大学組織）の公開性」という観点から、市民向けにいろいろとおやりになるにしても、例えばこの問題の発端となった、園の樹木の伐採や剪定のこと、植物園内の工事が植物生態に与える影響や、植物園で働く職員の雇用と解雇などの問題、等々についても、果たしてこれから大学外部の者が公正な視点から意見表明が出来るようになるのだろうか、と思います。そもそも、考える会が行ってきたことは、大学という教養（知ること）に価値をおいた組織に対して、同じく教養に価値を置きながら、別の教養（知ること）の価値を以て対抗してきた市民的な活動（これには説明が必要ですが）だったのだと思っています。

大学側（植物学教室や理学部）は自分たちが正しいという態度をもって、価値の上からは教養の持つ権威や威厳を背景にして、いろいろなことをやろうとし、説明して来た筈ですが、「いや、植物園は次のような活用がなされてこそ本質的な価値があるのであって、植物園の存在理由について、反って管理側の、また植物学教室等の認識を深く問うてみたい」といった、それは生物学の研究では、生態学的、系統分類学的なものの尊重、ということになるだろうと思いますが、そうした態度を表現してきた運動でした。

ですから、今、京大なり他の大学一般が、独法化以来迫られているところの「市民社会が大学に要望する公開性、それに伴って行なわれつつある今日的な、大学の組織上の変化」に関わる問題と、学問、教養（知ること）の上での「植物園の価値

の認識」とは、また別の次元のことだと思っています。それが心配と言えそうなのですが、……。ともかく、また改めて明日お書きします。



写真：開花中のハンゲシヨウ

2011年7月23日（土曜日）

埼玉の今日は、昨日ほどではありませんが、快適な日和になりました。前便のことですが、いくつか付け加えてみたいと思います。

まず、「京大植物園を考える会」は、その具体的な活動のやり方として「観察会」を実施して来ました。それで、そもそも問題の始まりとなったのは、植物園における非常勤職員の雇用問題（労働問題）でした。雇用主体の都合で、大学には非常に不安定な位置づけの職員が数多くいます。大学という場所で実際、雇用に現実的にどうした権力関係が生じているのか、企業で言えば子会社孫会社に当たるような二次的三次的な雇用にある人達の間は何が起こっているのか、それを気付かせた問題でもありました。

植物園の問題は、「観察会」が取り組んできた真っ当な教養（教養主義）に訴えるもの他、一方それ以上に大学に対する組織上の批判の側面が有

ったと思っています。「観察会」の運営主体は今後代わることになったとしても（それは本質的には大きな変化ですが）、しかし「考える会」の視線は本来的に市民感覚に有ると考えられる以上、「考える会」の視線は今後とも消えない筈のものだと思います。

ところで、私は「考える会」の活動や「観察会」の活動を指して、「市民的な」活動と言ってきました。しかし、実際は大学ではどうでしょうか。影山さんを初めとして自覚ある人々なら、何時でも「可笑しいと思うことに対して、誠実に可笑しい」と言うでしょうね。でも、今次の植物園問題についてですが、当の植物学専攻の学生や院生やらは、何を感じ、どんな行動を取っていたのか全く掴めず分かりませんでした。自覚ある人間であれば、どういう社会状況であっても、ものを言うところがあるでしょう。しかし就職上の不安を覚え、若者の雇用について自信を持たすことのできない現状では、大学のことで問題意識を持っていても表現しづらいでしょうね。今の政治は、そうした点でも特に良くありませんね。可笑しければ可笑しいと表現することが、何か将来的な不利益を思わせるようで、今の若い人達が口をつぐみ無関心を装うようであれば何かが死ぬのであり、学問とは一体何なのだろうかという問題になります。私が、観察会を初めとする植物園の問題で、最も残念に思ってきたことは、若い生き生きとした学部生や院生の多数の声が、そのほとんどは聞こえてこないことでした。

大学生の就職率の悪化をはじめ、若い研究者の将来性ある期待感を、時代が殺してきている現状こそ、本当は植物園問題の大きな根っこなのかも知れません。現実的な生活上の保障を得ようとして、知ることを抑制させ、自由な研究生生活に希望を与

えていないからですが。今の政治が、若い青年達に希望を与えるものとなっているのでしょうか。

さて、また長くなってしまいました。ともかく、観察会が100回を数えたこと、みんなが感無量の感情を持って、これで観察会を閉じようと思ったことに、その疲労や充実感に、私は静かに敬意を払いたいと思っています。お疲れ様でした。また、長くなってしまいました。文字化けしていたら言って下さいね。

編集部注：

寺田晶英さんは、『ゆくのき通信』の表紙絵をお描きになった人です。『ゆくのき通信』創刊の話が出たとき、迷わず寺田さんに表紙絵を描いていただこうと考えました。埼玉県在住の寺田さんは京都大学文学部の卒業生で、園丁の中島和秀さんの友人です。現在は母校である埼玉県立熊谷高校で教鞭を執っておられます。熊高からは、これまでも多くの学生が京都大学へ来ています。

寺田さんには、京大植物園を考える会ができた当初からメールを通して様々な助言をいただきました。また遠くに居られながらも途切れること無く、会とともに歩んでくださったという気持ちを私は持っています。描かれた池畔からの眺めは、植物園を訪れた多くの人たちの心に残っているのではないのでしょうか。いつまでも懐かしく、様々な記憶が蘇ります。(影山貴子)

思い出の京大植物園

坂崎 信之

(社) 日本植物園協会名誉会員

戦中戦後にかけての京大植物園の思い出を書けどのお話。ここの正式名称は「京都大学理学部附属植物園」だが、一般には「京大植物園」或いは「理学部植物園」と呼んでいるという。後述のように、入り口の門には「理学部植物園」の表札がある²。

折角だから、単なる懐古趣味で書いても意味がない。その昔、植物園を造りそれを育ててきた人々の持っていた意志や情熱から何らかの意味をくみ取って欲しいのである。いわば「温故知新」を願って書いてみたい。戦争が終わってから既に67年経つ。十年一昔というのだから「昔の京大植物園」と題してもおかしくないだろう。チョット面はゆいが、初代園長の郡場先生³と深い関わりをもたれたコーナー⁴著『思い出の昭南博物館⁵』(中公新書、1982年)にちなんでこのような題名とさせて戴いた。

² 以下、文中における建物などの名称は現在の呼称を採用した。また、登場人物の職業は主として話題当時のものとした。

³ 郡場 寛：コオリバカン 1882-1957 植物生理生態学 京都帝国大学理学部植物学科初代教授、シンガポール昭南植物園長、弘前大学学長など

⁴ コーナー：Edred John Henry Corner：英人 1906-1996 植物学者 昭南植物園副園長、ケンブリッジ大学教授など、日本との関わりが深い

⁵ 昭南博物館：戦時中のラッフルズ博物館(植物園、美術館などの総称)の名称、シンガポールは、日本占領下において昭南島と改名された

戦後、1950年に建設が始まった大阪市大植物園（大阪市立大学理工学部附属植物園・理工学部は現在は理学部となる）に翌年から私も参加したが、そこに郡場先生がお出で下さってご指導を受けた。また、昔の『シンガポール植物園ガイドブック（英文）』（1927年頃刊）を参考にと下さったのであるが、私はいわば郡場先生の不肖の孫弟子という故でもある。既に60年以上も前の話だから、記憶違いも多々あるだろうが、お許し願いたい。

戦中戦後、私が学生だった頃の話

私が学生として植物学教室に入ったのは昭和20（1945）年いわゆる終戦の年の春であった。建物はコンクリート製・凹形3階で動植物学の部屋が半分ずつを占めていた。その中庭にあった木造の教室で講義（確か駒井先生⁶による古典遺伝学か上野先生⁷による生物学史か）を聞いたが、教室も臨戦態勢で、間もなくそれを取り壊す作業に駆り出された。焼夷弾による火災を防ぐ為である。ほかに植物学教室の図書・標本の取めてある別棟があり、動物学教室の北側に離れて「寄生虫」と呼んでいた建物もあったが、詳しくは知らない。

植物学教室の教員も交代で宿直していたし、我々学生も付き合わされた記憶がある。実際、屋上の見張り役をやらされた際、西陣に爆弾が落ちて爆発音と同時に黒煙が上がるのを見た。京都も全く爆撃がなかった訳ではなかったのである。余談だが、空襲に備えて交代での夜勤に学生も付き

6 駒井 卓：コマイ タク 1886-1972 動物遺伝学・動物系統学・進化論 京都帝国大学理学部動物学科教授（東京帝国大学教授を兼任）、のち国立遺伝学研究所部長など

7 上野 益三：ウエノ マスゾウ 1900-1989 昆虫学・陸水学 京都大学大津臨湖実験所所長、のち同教養部教授など

合わされた際、或る教授が昼間は普通の服装なのに、夜には将校の軍服にサーベル姿で威張って腰掛けていたのを見て驚いた。その方は戦後は組合の偉い人になったとか、理学部にも変身上手、世渡り上手な方もいたのである。

先生方の恩

私が指導教授をお願いした芦田先生⁸は初代教授だった郡場先生の直弟子のリベラリストであった。戦後、理学部長も務められて大学運営に尽くされたが、後年一切の叙勲を辞退されたと聞いて今更ながら先生の人柄が偲ばれる。農学部に移られた「ゲノム説」の木原先生⁹・「開花生理」の今村先生¹⁰にも師事し、これらの先生方から、芋づる式に情報を集める方法や研究の進め方についての基礎を教えて戴いたことは今日まで大変役立っている。旧制高校（鹿児島）の先輩でもあった今村先生には人生勉強の様々な教えも戴いて私の今日があると感謝している。

植物分類については顕花植物が北村先生¹¹、隠花植物は田川先生¹²の講義や実習を受けた。田川先生

8 芦田 譲治：アシダ ジョウジ 1905-1981 植物生理学 京都大学理学部植物学科教授、のち愛媛大学学長など

9 木原 均：キハラ ヒトシ 1893-1986 植物生理学・遺伝学 京都大学農学部教授を経て、木原生物学研究所所長、のち国立遺伝学研究所所長など

10 今村 駿一郎：イマムラ シュンイチロウ 1903-1986 植物生理学 京都大学農学部教授を経て、甲子園大学学長など

11 北村 四郎：キタラム シロウ 1906-2002 植物分類学 京都大学理学部植物学科教授

12 田川 基二：タガワ モトジ 1908-1977 植物分類学（シダ類） 京都大学理学部植物学科助教授、のち同教授

の話「新しい名前(学名)を付けたがるのは分類屋の悪い癖です。自分の名前が残るからです。」と仰っていたのは印象深い。

また、村田源さん¹³には親しく、且つ親切に教えて戴くことは今に続いている。村田さん(尊敬と親密さをこめて「さん」と呼ばせて戴く)の年齢は多分私と余り変わらない。今でも時々お手紙を戴く。私の学生の頃は標本整理や植物図など北村先生の助手としての仕事をしておられたと思う。共著の『原色日本植物図鑑』(保育社)があり、植物の名前や分類については大変詳しい方で、とても親切に教えて戴いた。

後日、大阪市大植物園で創設の仕事をした際には植物園内に野生する植物は標本を作って村田さんに丸投げをして同定をお願いし、吉良園長¹⁴・玉利副園長¹⁵と三木先生¹⁶に指導を戴いて『大阪市立大学理学部附属植物園植物目録』(1960年)を拵えたのが記憶に強く残る。大阪市大植物園の創設当時はとても忙しかつたので、たまに村田さんを訪ねる程度になってしまったが、その時は植物園や林学の苗圃に直行し、種子を拾ったり、苗を戴いたものである。当時、ジェーン台風¹⁷の為に大学予

算が少なくなり、買うことが困難で、自ら「苗乞食」と称していた。集めた種子は海外との種子交換にも利用し、様々な方法で植物を収集、苗を育てたのであった。また、熱帯植物や園芸的な種類は玉利先生(後述)の顔で入手できたものも多い。

同期生のこと

せっかくだから私の同期生(植物学専攻)について述べておこう。戦時中という理由で、高等学校の卒業前に希望の大学・学部・学科などを書いて出す。第一希望から第三希望位あったものである。入学迄の経緯は当時の興味深い歴史物語があるのだが、長くなるからここでは省略しよう。当時、京都帝国大学理学部植物学専攻に入学したのは私を含め5名と記憶する。内、2名は徴兵逃れの為に入ったので、敗戦と共にやめてしまった。残りは3名。私と仙波喜三君(三高出身、学術書編集者となる。後日、蒼樹書房を興して多数の優れた生物学書出版に寄与し、日本生態学会より感謝状)、馬場三吾君(浪高出身、第三研究室で組織培養の研究を進め、後、甲南女子大学の理事・教授、日本(国際)植物組織培養学会を主導)。また敗戦後、北大から転学してきた柳島直彦君(四高出身、酵母を使った生理学研究、大阪市大から名古屋大学教授、先進的研究で将来ノーベル賞クラスの仕事を期待していたが残念にも早世)がいた。私といえば、鳴かず飛ばずで何とか生きているという始末。だが、大阪市大植物園の創設に関わったので植物園の事については「一家言」と迄は行かぬが、多少は詳しい。

当時の植物学施設の光景

植物学教室の南側には狭いながら研究・実験用の畑があった。また、半地下式小型ガラス室があ

¹³ 村田 源：ムラタ ゲン 1921— 植物分類学 京都大学理学部植物学科嘱託、のち同講師を経て現在森林再生支援センター名誉理事長

¹⁴ 吉良 竜夫：キラ タツオ 1919—2011 生態学 大阪市立大学理学部教授、のち滋賀県琵琶湖研究所初代所長など

¹⁵ 玉利 幸次郎：タマリ コウジロウ 1900—1992 植物育種学・植物園芸学 大阪市立大学教授

¹⁶ 三木 茂：ミキ シゲル 1901—1974 植物生態学・化石植物学 大阪市立大学理学部教授、のち武庫川女子大学教授 メタセコイア現生種を発見

¹⁷ 1950年に強風により近畿四国地方に大きな影響を与えた台風

り、当時は田川先生のシダの植木鉢が沢山並んでいた。昭和 22 (1947)年頃の卒業実験では、その奥にある部屋を私と同期生の仙波君が使わせて貰った。教室から向かい側にあった地質館物の建物に沿って右折し、農学部の方に向かうと左側に大きな温室があった。それは植物学教室の施設であったが、既に燃料がなく、手入れもされず熱帯・亜熱帯植物は殆ど枯れていた。そこに唯一種だけ逞しく生きていた常緑ツル植物があった。今考えると南西諸島以南の産ミツバビンボウヅルだったと思う。どういう訳か大変印象深いので、その後入手して我が家の庭に育ち、冬にはいくらか傷むが、戸外で育っている。



図 1: 北村四郎・村田源共著 保育社『原色日本植物図鑑木本編 [1]』1971 年所収、図版 70-433 のトビカズラ

このことについて村田さんから興味深いアドバイスを戴いた。「つぶれかけた大温室(ガラスまで割れていた)の中に元気で我が物顔に蔓延っていた常緑のツル植物はトビカズラ(マメ科)ではないでしょうか。北村四郎・村田源共著保育社『原色日本植物図鑑木本編 [1]』1971, P. 350 と Pl. 70-43.

のトビカズラ(図 1、熊本県にある、今では特別天然記念物になっている一名アイラトビカズラ)があり、その植物から図を描いた大変珍しい植物なのです。これが枯れてしまったのは大変残念なことでした。その植物は小泉先生¹⁸がチャンチンモドキと共に熊本から 1932 年に持ってこられたもので印象が深かったのでよく覚えています。」というのである。

という訳で、私がミツバビンボウヅルと思っていたのは、実はトビカズラだったかもしれない。そういえば温室の鉄骨に巻き付いていたのがトビカズラで、ベンチに這うように延びていたのがミツバビンボウヅル(ブドウ科)だった。とすると、唯一種だけではなかったのである。チョット面白いのは、両者が常緑ツル植物であること、三小葉というのが共通する事である。人間の記憶などというものはその程度なのかなと思ってしまう。

当時、その温室の一部は理学部から農学部に移った今村教授がアサガオの開花研究の実験に使っていたと記憶する。通路の右側で陵墓に接していた畑は木原教授グループの植物遺伝学実験の小麦畑であった。

現在、物理や数学の研究の為の諸施設がある場所はかつて植物園の道路沿いにある多草や一年草の植栽域であった。しかし戦争も末期、更に敗戦となると食糧事情が悪化し、研究材料を理由としてサツマイモの畑となっていた。勿論、その蔓や藎を使った研究・実験を行ったのだが、その多くは人間にとって当面の生存の為に消費されたのは勿論のことである。多分、それは他の研究室の人達から羨望の目で見られたに違いない。後に、

¹⁸ 小泉 源一: コイヅミ ゲンイチ 1883-1953 植物分類学 京都帝国大学理学部植物学科教授

その辺りが湯川記念館などの敷地に提供させられたのは、その頃の印象が影響したかもしれない。

戦後については『概要 - 1970 - 京都大学理学部附属生態研究施設』に当時の現状や沿革が纏めてある。植物園の道路に面する処は基礎物理研究所、数理解析研究所に土地を取られ、また生態研究施設や温室ができて昔の面影はないが、その外の池など全体の配置については今でも大凡昔の面影を残していたようである。

長年ぶりで拝見した植物園の変貌

先日といっても昨秋になるのだが、長年ぶりで植物園を訪ねる機会を得た。その時は図書室の久松・影山のお二人とご一緒に色々とお話を聞くことができたのである。かつて今村研究室が実験に使っていた温室も木原研究室が使っていた小麦畑もその面影はない。その代わり生協の食堂が建っていた。隣に接する陵墓のみは昔の面影を残していた。

左に農学部の建物を見て進むと正面に植物園があった。昔と同じ場所である。只、門の位置や広さが違うと感じたのだが「理学部植物園」という藍色の表札だけは昔のままと見た。「ゆくのき通信第3号」(2007年)には、1960年頃、村田源氏撮影の昔の門及び、いわば「植物園の主」井上清三郎¹⁹さんの住まわれていた官舎の写真がある。この写真は私の記憶を呼び覚ましてくれるのに大いに役立った。

造園の専門家には、「昔の庭を見る時には築山や池、石の配置などを見なさい。そこに植えた草木

は年々変化します。だから木の育っている状態などは昔と全く変わっていると考えて良い。」と教えられた。今回訪れた京大植物園も昔あった筈の低木の見本樹が枯れてなくなっていたり、全く記憶にない木が亭亭と育っているなど、昔の面影は少ない。植物園の管理に習熟し、にこやかな顔で私など学生の間には丁寧に答えて下さった井上さんの居られた官舎の跡形もない。

この写真で見ると、1952年には既に湯川記念館ができていたし、草本展示用の畑地を提供して少し狭くはなったが1960年頃までは殆ど変わっていなかったと想像できる。「生物学閑話 第IV集」には「湯川記念館に土地を提供した代償に、植物園の中に実習やディスカッションに使える家を建ててもらった。土台は杭で一寸とめてあるだけで、すぐ取りのけられる。」とある。今の池の南側にある建物を指すのであろうか。勿論、その頃は既に私はいなかったので記憶にない。

園の植物の昔と今

前述の1960年頃に村田源さんが撮られた写真にある門扉に重なって見える樹にはラベルが見える。これは、今もあるチャンチンモドキ (map-a)²⁰だと思う。チャンチン (map-b)は写真では官舎の裏側で道路との間にあった。それも、先日健在であると確認した。入り口を入ったすぐの右側にあるチャンチンモドキ、その奥にあるチャンチンは昔からのものと思う。

ところで、タケ類 (map-c)の見本植栽は余り変わらない姿で境界柵に沿って残っている。かつて

¹⁹ 井上 清三郎：イノウエ セイザブロウ 故人（生没年不明）1924-1966 京都大学理学部附属植物園園丁 黄綬褒章受章

²⁰ 本稿末に、編集部作成による植物園配置図を付した(p. 19)。括弧内のアルファベット記号は、それぞれの植物などの地図の中に示された位置と対応している。参考にされたい。以下同様。

は、ラベルがかなり整備されていたと思う。ラベルは珪瑯（ほうろう）製なので、傷さえなければ耐久性がある。しかし、支柱は木製なので暫くすると腐ってしまう。私の見た頃には既に支柱が腐ってラベルのみが地面にあった。このラベルは1930年代に設置されたものらしい。先日園丁の中島さんから「たまにラベルが埋もれているのを見る事がある。」と伺った。「もし今度見つけたら大切に保存して下さい。」とお願いした。もし、残っていたら珪瑯製の耐久力が証明されるだろう。植物園でのラベルの材料やその内容表現についてはいまだに問題が多い。ラベルは正しく書いてあって、しかもその名前の植物についていなければ、むしろ害を及ぼすことになる。百貨店の商品に間違った説明や価格が書いてある場合を考えれば誰でも納得するだろう。

入り口近くには短冊状のコンクリート水槽に絶えず水が流れ、実験用の水生植物オオカナダモが他の種類を圧倒して育っていたが、それもまた影も形もない。



写真1：イヌカラマツの毬果（坂崎信之撮影）

真っ直ぐに進むと、突き当たりの右手に高く聳えるイヌカラマツ (map-d)がある(写真1)。針葉樹で落葉性の種類は余り多くないと思う。落葉性の種類はこの植物園でも他にスイショウ（現在消

滅)、メタセコイア (map-e)、ヌマスギ (map-f)位である。どういう訳か日本原産のカラマツはないようだ。イヌカラマツは一個体しかないの、記録にある1940年に三木が中国・杭州で採集したものに間違いはないと思う。(資料は後述の1973年の大学紀要による。以下同じ) 私の見た頃はまだ5~10年生位で高さも5m位だったかと思う。種子を捜したが、まだ結果年齢には達していなかった為に私が大阪市大植物園にいる間にはそれを導入できなかった。尚、大阪市大植物園にはカラマツを植えて既に50年経過しているのでチョットした林になっているというのは自慢話のつもり。

さて、肝心のイヌカラマツは中国名で金銭松・金松という。中々縁起の良い名前でも気に入った。大凡の高さや幹廻りは測ってみたが、せっかくだから案内戴いた影山さんに専門の方に測って戴くようにお願いした。結果は、影山さんの知人のご紹介で、京大農学部森林科学専攻、森林生産学研究室の岡田直紀さんがイヌカラマツとメタセコイアの樹高を測ってくださった。結果は下記の通り。

『イヌカラマツ (180 c m) 23.2m : メタセコイア No.217 (350 c m) 30.1m : メタセコイア No.218 (295 c m) 33.0m』(坂崎注：後で植えたメタセコイアの方が樹高、幹廻り共に大きい。樹種の生長の違いも考えられる。)

訪れた2011年12月6日、イヌカラマツの幹は殆ど完全な円筒形で、樹冠部に多くの毬果をつけている。羽のついた種子が多く落下していた。測定の結果、樹高は23.2mあるというので、平均して1年に30cm伸びたことになる。条件が良ければもっと伸びるかもしれない。しかし、台風などで枝先が折れ、また伸びたこともあろう。樹冠の様

子を見るとほぼ伸長生長は終わりに近づいていると察する。植物園の境界に位置するので、風当たりは強い。由緒ある樹なので、何とか生き延びて欲しいものである。せつかくの樹だから、何らかの記録を残すべきだと思うのだが、その様な苦勞をしても何の業績とも評価されない今の時代か？もう 86 歳になる生きた化石である私の時代錯誤の考えかもしれない。

生きた化石といわれるメタセコイアについては、私の学生の頃はまだ日本にはなかったが、既に中国の奥地で生きたメタセコイアが発見されたという情報はもたらされていた。植物園の主、井上さんが「三木先生も当てはりましたな」と感慨深そうに話しておられたのが記憶に残る。一方、私の勤めていた大阪市大植物園では、ある教科書会社がスポンサーになってメタセコイアの苗を全国の小中学校に配布する仕事を大忙しで手伝った記憶がある。今、アチコチの小中学校で見られるのはその時のものだろう。メタセコイアについては『ゆくのき通信』第 6 号に斎藤清明²¹さんが書いておられる。

話はずれるが、久松さんのお話では「風媒花なのに一本だけでどうやって結実してるのか、というのは生物としての謎です。イヌカラマツの結実については、村田先生が再三、この疑問を仰ってました。人間が決めつけられないことがある、と。」このことについては、私にも経験がある。しかし次の事実がある。大阪市大植物園にはブラジルマツが早い時期に導入された。当時、熱海の或る御屋敷にブラジルマツがあつて種子ができる。それから生えた苗だ、という話で玉利先生（熱帯植物

に関する権威者で私は大阪市大植物園では色々と教えを受けた。定年後、郷里の鹿兒島に引退されたが、そこでも又活躍された薩摩紳士) が貰ってこられたものである。その一本が大きく育った。20 年程前だったが、私はその大きな樹の下に沢山の種子を見つけた。ブラジルマツは多分近辺にはない筈。ブラジルマツは大きなボール状の毬果を付け、熟すると種子がバラバラになって落ちる。この種子には「しいな」が多いのだが、充実している種子も拾うことができた。この種子は我が家で発芽し、いくつかの植物園に配ったことがある。この種子は食用になるので、ブラジルでは大切に保護している。聞く所では、一本切るのにも許可を受けて新たに三本以上植える義務があるとかいう。ということで、イヌカラマツの場合でも一本のみでも充実した種子をつけることは充分あり得る。しかも、この樹の高い場所には一杯毬果を付けているのを見た。だから、沢山の羽をつけた種子が下に落ちていた。但し充実した種子の割合は少ないだろう、と私は考える。

奥の疏水（そすい）よりの導水口 (map-g) 附近に小さな池兼湿地がある。私の記憶ではその端にヌマスギが育っていた筈と思っていたが、今回それは見つけられなかった。私の記憶違いかもしれない。代わりに一番深い池の側によく育った株があり、特有の気根（呼吸根）が筈のようにアチコチに出ている。北米の原産地では沼や湿地の中から樹が生えている。また、同じ導水口からは細い流れが池に注ぐのだが、その途中に洞穴 (map-h) がある。元はヒカリゴケがあつたと教えられたが、私の時代には既に見る事はなかった。私の目が悪かったのかもしれない。

一方、その反対側だったと思うが、海岸砂丘を

²¹ 斎藤 清明：サイトウ キョアキ 1945— ジャーナリズム・自然学 毎日新聞社編集委員、のち総合地球環境学研究所教授

想わせる場所があり、畠山先生²²による生態学実習で微細気象（局所的な温度や湿度測定）を習ったりした。その場所は日当たりも良く、ハマエンドウやハマゴウが拡がって綺麗な花をつけ、ハマナツメの小木があつて独楽を思わせる形の果実を付けているのが印象に残っている。ハマナツメは三木先生が鹿児島から持ってきたものとの記録がある。そして「鹿児島産のものを京都に植えると、段々早く花がさいて実ができるようになってくる。」と述べている（生物学閑話 第II集）。私も暖地や四季が逆の南半球から持ち込んだ植物が段々と植えた土地に慣れてくると思う経験が少なくない。しかし今では、記憶していた海岸砂丘を想わせる場所は全く判らず、現在ヒイラギモチ (map-i) が生い茂っている辺りかと記憶する。海岸性の種類のハマエンドウ・ハマゴウ・ハマナツメなどはほかの植物に圧されて既にその影も形も見えなかった。



写真2：トウサイカチの幹に生える刺（坂崎信之撮影）

池の近くでは、今では大木になっているトウサイカチ (map-j)（写真2、1939年三木が北京から

²² 畠山 伊佐男：ハタケヤマ イサオ 1910-1997 植物生理生態学 京都大学理学部植物学科助教授のち同教授、京都大学理学部植物学科生態研究施設長

持ち帰った種子によるもの）はまだそれほど目に付く大きさではなかった。日本のサイカチの豆莢がよじれるのに、この種類の豆莢はよじれることなく扁平である。

通路に近くシュロが数本育っている。これは私の学生の頃はまだ背丈に達していなかったと思う。場所柄、根元が踏み固められることもあつて生育は遅く、瘠せているように見える。「1950年4月、シュロが高さ1.8～2.3mぐらいになった。これは、この植物園と同じ年齢ですよ！（生物学閑話 第IV集）」と郡場先生が話されている。私も、現存する記念すべき植物の一つと思うのだ。そこで、久松さんに調べて戴いたら大凡次のような返事を戴いた。ただし（ ）内は私の注。

シュロについてですが、植物園に見に行ったらプレートにはトウジュロ (map-k) と表示されていました。植物園長の田村実先生²³（御父君の故田村道夫君²⁴は私の一年後だった優れた分類学者）が精力的に植物園の樹木にプレートをかけてくださっています。トウジュロについては、元京大理学部植物生態研究施設、生態学研究センターに所属しておられ、何年か前に退職された田端英雄先生に、移植のことなど問い合わせしてみましたところ、下記のお返事をいただきました。

「確信はありませんが、あのエリアは設立時にデザインされたものではないかと思います。シュロの部分と、それに隣接してシバ草地に囲まれた気象観測のための百葉箱がセットになっていました。

²³ 田村 実：タムラ ミノロ 1961- 植物分類学 大阪市立大学理学部研究科准教授を経て、2009年より京都大学理学部植物学科教授

²⁴ 田村 道夫：タムラ ミチオ 1927-2007 植物分類学 神戸大学理学部教授、のち近畿大学教授

建物の建設ということになれば、湯川さんがノーベル賞を貰った時に建設された基礎物理学研究所以外の建物が建設された時は全部知っていますが、建設に伴ってシュロが移植されたということはありません。」

これら、シュロについては1973年の目録にも、シュロ（「池田より」とあり、池田は大阪の北部にあり植木屋が多い地域）と出ている。とすると、苗を購入、植栽したのであろう。なお今の技術なら、地面近くの組織の一部を測れば年齢も解ると思う。



写真3: タイワンソテツ (坂崎信之撮影)

チシャノキ (map-l) かマルバチシャノキ (map-m) (共に小泉による琉球からの採集品) は戸外で育ってはいれるものの、寒さの酷い冬には枯れ込みが激しく、伸びては枯れ下がることをくり返し既に半世紀以上も経つけれども生き続けている姿はかつての思い出と重なる。池の縁に2株目立つタイワンソテツ (map-n) (写真3、1940年田川による台湾・台東の採集品) は私の記憶にない。当時はまだ鉢植の幼苗だったに違いない。私の見たところ、これは雌雄一対と思う。京都の寒さでは結実は見込みにくい。貴重な種類なので、栄養繁殖して暖地の植物園などに危険分散を図る必要がある。タイワンソテツに接してロウアガキ

(map-o) が可愛い朱色の実をつけていたが、1973年の目録に記載がないのでその後植えたものに違いない。

池の北側、現在チャンチンモドキが亭々と育っている辺りは、昔はその樹がなく、ヒョウタンボクやルリヤナギなどの低木類があったと思うが、今は見ない。申し訳ないがユクノキ (map-p) については全く記憶がない。その頃は幼木で目に付かなかったのかもしれない。とすると、成長の早い種類なのであろう。

高木が覆い、日当たりの必要な低木は消えて行く。風や人・鳥が運んできた望ましくない植物達、横に地下茎を伸ばすタケ・ササ類など、それらをコントロールしないと半世紀そこそこで植生が全く変わってしまうことを目の前にした。自然に放置するか、或いは何処まで人手を加えるかについては、それぞれの植物園の行き方であろう。

由来がはっきりしている個体は勿論、大凡の出場所が判っている植物は何らかの形で保存する価値があると考えられる。また、「生けるもの必ず死す」のことであり、何時かは枯死する運命があるのでデータ、図、写真、腊葉標本などとして残す方法もあるだろう。将来の為の資産と思えばのことである。

1973年には、畠山伊佐男、村田源、田端英雄共著の英文の論文『京都大学植物園の植物リストと若干の生態学的データ』を戴いた。その論文には畠山先輩の「退官記念に」と云う署名も記されている。そこに載せられている植物リストは村田源さんが直接関わっておられるので、これ以上の信頼性が高い資料は今後とも中々得られない貴重なものと私は思う。

京大植物園設置の事

京都帝国大学理学部附属植物園は大正 12 (1923) 年に開設されている。京大植物園設置の経緯については、昭和 37 (1962) 年から出された木原 均『生物学閑話 一郡場 寛博士との対談一』(第 IV 集までである) に昔と当時の植物園についての記録が残っている(写真 4-5)。

その昔、京都では鴨川を隔てた東は平地から東山にかけて点々と寺社多く、刑場もあり、祇園の社の下に町からは外れた廓もあったという。山麓一帯のほかの土地は田畑だった。要するにそこはもう、町からは鴨川で仕切られた田舎だったのである。



写真 4:「建設中の理学部附属植物園より東北方比叡山方面をのぞむ」、京都大学農学部創設当時(大正 12 年(1923)頃)の写真(『生物学閑話 一郡場寛博士との対談一』第 II 集、廣川書店、昭和 41 (1966) 年、p. 22)



写真 5:「西南方京都大学本部方面。右手の木立は後二条天皇北白川陵」、京都大学農学部創設当時(大正 12 年(1923)頃)の写真(『生物学閑話 一郡場寛博士との対談一』第 II 集、廣川書店、昭和 41 (1966) 年、p. 23)

だから、郡場先生は「農学部建設のとき疏水〔支流〕の西南部全域とか比叡山の麓までとか、市が京大に寄附しようというので「そんなにはいらん」と断ったとか・・・」「(先生は農学部設立に際し

ては創設委員として大きく関わった) だましてもらったようなものですか！イヤ、農学部の建物を方々へ散らばして建てる図面をこしらえて出したのですよ、そして安い値段で買いとらして寄附さしたのです。その「農学部の土地」に理学部が植物園をこしらえ、グラウンドやプールも夫々物干場とか灌漑用水池としてできた。」(生物学閑話 第 IV 集) という話は、植物学教室から離れたあの場所に植物園ができた当時の事情を物語っているが、私にとっても夢物語である。京大植物園に琵琶湖からの疏水の水を引くことができ、今もその水の恩恵に預かっているのはその様な時代背景、先人の夢と努力があったのかと深い想いが残る。

郡場先生と植物園

京都という所は不思議な所で、大変古い物(保守的なもの: 例えば御所、社寺、葵祭、祇園祭、西陣織、清水焼、等々)と新しい物(革新的なもの: 疏水、日本最初で今はなくなったインクライン、市電、ノーベル賞受賞、独自の先進産業、等々)とが混在するような気がする。京都府立植物園は府県立の植物園としては日本で最初のものである。詳しい経緯は別として、大正 6 (1917) 年に着工し、同 13 (1924) 年 1 月 1 日に大典記念京都植物園として開園している。一方、京都帝国大学理学部附属植物園は大正 12 (1923) 年とほぼ同時期に開設されている。立役者の郡場教授は両方の植物園の初代園長を務めた。

なにゆえに、ほぼ同時期に府立の植物園と大学の植物園ができたのかについて興味ある記録を紹介しよう。京都日出新聞大正 11 (1922) 年 1 月 17 日の記事である。(新漢字・新仮名遣いに替え句読点をつけた。なお新聞紙上では郡場教授を「ぐんば教授」と仮名を振っている。)

京大植物園設置 七万二千元の予算計上

学問研究に必要と 郡場博士語る

京大理学部附属の植物園が造られることになり、文部省から七万二千元予算に計上されることになった。仮にも植物園とも名付けられるものが七万二千元計りで出来る筈はない。京大からは敷地買収費、建築費、造営費等を合わせ相当多額の要求をしたのだが文部省で削られたものらしい。京都には約十万坪の府立植物園が近く開園されようとしており、その園長は京大の郡場教授がやっているのだから、その植物園を使ったら便利だろう、と素人がいうのに対して郡場博士は、

府の植物園は可及的ポピュラーに造るのが目的ですから学問の研究には適当でない。諸種の設備・植物の配置・収集等、すべて一般民衆を目的とするものと学問研究を目的とする物とは自ずから異ならなければならぬ。もし又、府の植物園を学問研究に適するように造営しようすれば莫大な金を要して到底実現さるべくもない。これ、小規模でも学問研究に適する植物園を別に設置せざるをえない所以です。

と云い、岡本書記官も同じように説明している。七万二千元の金を何に費やすつもりかに就いては未だ議会でどうなるかさえ定まらない今日、だからといって両氏とも口をつぐんでいるが、通過するだろうとは一般関係者の観測で、通過したならば直ちに着手することになるであろう。

以上のように、郡場先生は目的の違う植物園を別に設ける意義を明確に示している。

先生は京都大学に来る前、学生時代は日本で初

めての東京大学の植物園で学び、大正2(1913)年から北大(当時は東北帝国大学農科大学)に在籍し、出来てまもなくの北大植物園も見ている。大正6(1917)年には京都帝国大学理科大学生物學教室開設々計顧問となり、翌年から2年間米・英・仏・伊・スイスへ留学し、帰国後京都帝国大学教授となった。当然、京都に新設する植物學教室の構想は常に頭にあったであろう。外遊の間ヨーロッパの代表的な植物園、例えばイギリスのキューなどの大規模な植物園をつぶさに詳しく視察してきた。植物園がヨーロッパでどのように成立し、発展してきたかを十分に承知していたはずである。それらが人々の教養・慰安や遊樂の場として、また、植物研究の場の両方を兼ね備えるものであり、その様な植物園の建設には広大な敷地、大規模な温室、研究の為の諸施設が備えられ、国家が支えてきているものということをよく理解した一人である。京都とはいえ地方自治体で造ることはとても不可能と考えたのは尤もなことである。従って、京都府立植物園は一般向けの教養・慰安に主眼を置いたものと考えた。

もし、大正10(1921)年から昭和4(1929)年までの園長であった郡場先生がそこで植物研究を目論んでいたとすると、京都府立植物園へ理學部植物學の卒業生を送り込んでいたに違いない。が、実際はその様なことにはならず、二代目園長は農學部の菊地教授が継ぎ、農學部の卒業生が植物園の經營に携わって今日に至っている。

しかし、ここでは詳しい経緯に触れないが、府立植物園にある大森記念文庫に本草・園芸・薬草・生け花など、植物に関する基礎及び応用分野の重要な文献を備える努力をしたのは他ならぬ郡場園長である。中には、明の李時珍著『本草綱目(金陵本)』のように世界に三ヶ所しかない貴重なもの

も含まれる。

ほぼ同時期にできた二つの植物園であったが、京都大学理学部附属植物園はご存じの通り、教育と研究の為の大学の施設なのである。従って、原則として大学の教職員・学生達が支え、利用する施設であって一般市民に公開はしていない事実がそれを物語っている。郡場先生は京大植物園の設計に当たって“分類学的な植栽配置”もさることながら“生態学的な植栽を加味した植物園”を構想しておられたと思う。その中には高山地帯を想わせるロッケリー、海岸植生を表現する砂丘、山の谷筋の湧水から湿地、池、沼（水深を変えた所に適した植物を植える）、それに、水田のような人工的な場所など、擬似的な生態標本区画を拵える考えがあったと思う。私の学生の頃は、海岸砂丘を想わせる場所があり、ヒカリゴケのあった洞穴の石組みは今でも残っている。前述のように先般、砂丘地帯のあった場所へ行つたが、今はその片鱗さえ見つけることができなかつた。水深の違う池、沼は今も手入れされて残っていた。

行く末を思う

日本に於ける植物の研究は自然の高等植物を対象としたものから出発したが、顕微鏡や分析機器の発達に伴い、研究材料・対象は変わって行く。エンバクの芽出しを使ったアベナテストなど生長素の研究がその時代の流行だったと思う。しかし下等植物を使った研究、例えば食品に繋がったクロレラ、抗生物質の走りとなったアオカビ、未だに実用栽培化できていない(?)マツタケの研究などはあった。それが次第に試験管やシャーレで培養できるような植物（昔は、構造が簡単な藻類な

どは何の根拠もないことを意味する「根も葉もないもの」などと呼んだが)を対象とする研究に重点が移っているように思える。実験結果が早く解り研究の能率が良いということに大きな理由がある、と私は考える。

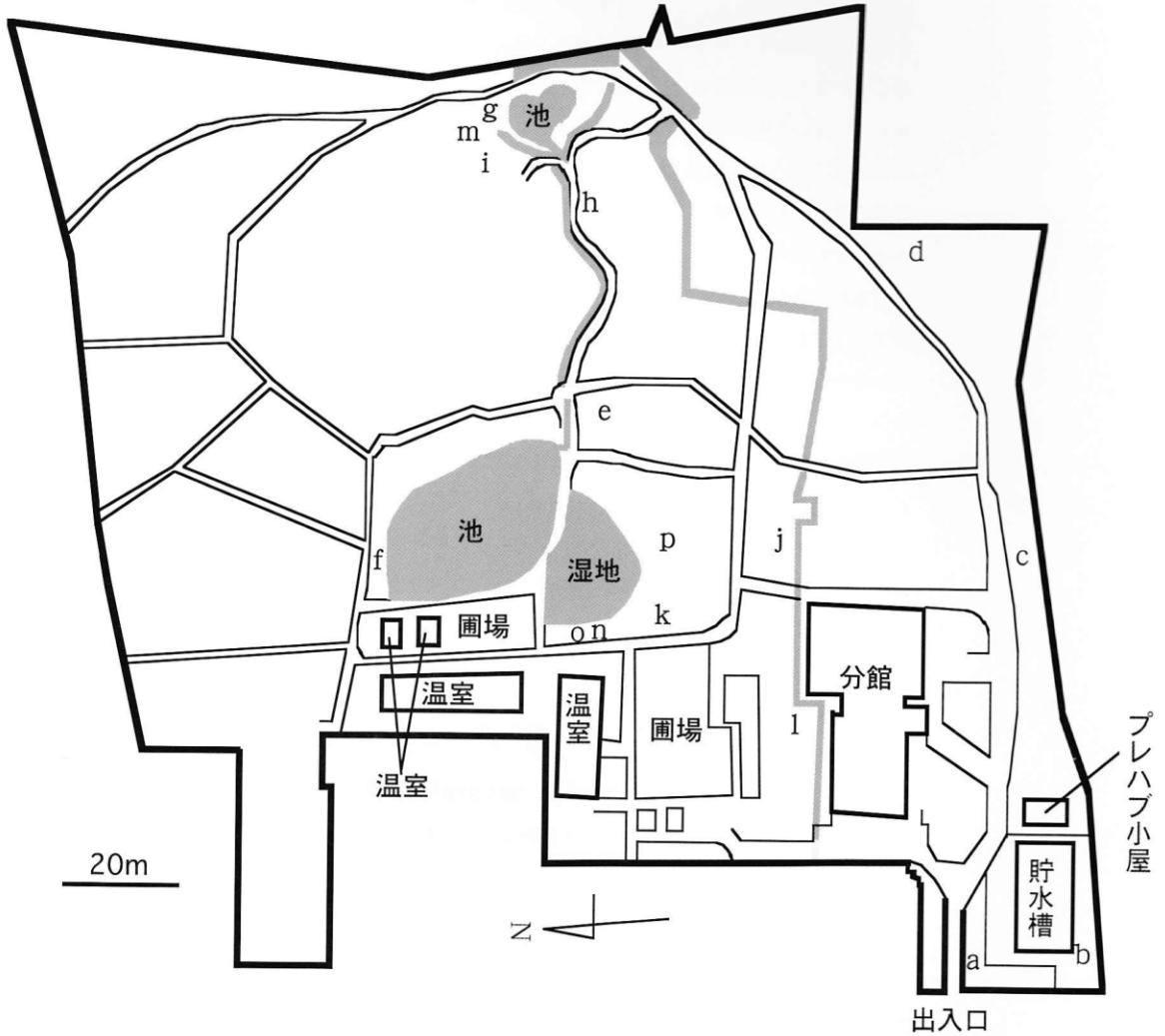
前述のように今の所、京大植物園の植物リストは1973年に発行されたのが最も新しいものと考えられる。植物リストの作成は労多くして、業績として評価され難いという問題を抱えているので、誰も余り手を出したがらないのが現状であろう。しかし、数えると既に39年経過している現在、その後の植物の変化を考慮に入れたコメント付きの新しいリストができることを期待したい。基礎資料として研究には勿論、教育面でも役立つと思うからである。最近、高等植物は資源保護、環境保護などの立場から見直されているようにも見える。老い先短い私には、植物園の移り変わりをどうすることもできないが、将来の植物園がどのように変化して行くのかを考えるだけでも一方では寂しい気もするし、また興味深いことでもある。

謝辞

最後に、私に原稿を書くことをお勧めになって植物園を案内して戴き、資料を捜し、また略図や注記のお手伝いを戴くなど、色々のご面倒を見て戴いた影山貴子さんご夫妻、久松ユリさんほか、生物科学図書室・植物園関係の方々、それにイヌカラマツ・メタセコイアの計測をして戴いた農学部の岡田直紀さんに深く感謝する。さらに、この報告に際して、資料を提供し、添削の労を惜しみなく戴いた桜田通雄・邑田裕子・森弦一・安藤満喜男・村田源の諸氏に感謝したい。

京都大学理学部植物園配置図

(作図: 影山貴子)



- | | | | |
|---|----------|---|----------|
| a | チャンチンモドキ | i | ヒイラギモチ |
| b | チャンチン | j | トウサイカチ |
| c | タケ類 | k | トウジュロ |
| d | イヌカラマツ | l | チシャノキ |
| e | メタセコイア | m | マルバチシャノキ |
| f | ヌマスギ | n | タイワンソテツ |
| g | 疏水取水口 | o | ロウアガキ |
| h | 洞穴 | p | ユクノキ |

編集後記

京大植物園というと、こんもりとした「森」が発達した林床部をイメージする方が多いかもしれませんが、「圃場」部分とともに「温室」は植物園をなしています。昨年度まで、生物多様性GCOEの助教として植物園で研究活動をされていた篠原涉さんに、この温室を舞台としたご専門のシダに関する研究生活についてご寄稿いただきました。篠原さんの文章からは、研究の苦労話の中に、大きい温室、「ボロ」の温室、それぞれへの愛情のようなものが読みとれます。

去る2012年7月で「京大植物園を考える会」の主催による植物園観察会が終了して、1年が経ちました。遠く関東から「植物園問題」の推移を丁寧にフォローし、真摯に思い続けてくださった寺田晶英さんからご寄稿をいただきました。寺田さんが指摘されるように、植物園の樹木伐採を契機として、理学部植物園という存在が私たちに提起した問題のうち、根本的なことがらは何一つ解決されていないのかもしれない。

また、今号では植物学教室OBであり、戦時中、戦後直後の植物園をご存知の坂崎信之さんに、かつてと今の植物園のありようを比較した貴重なご寄稿を頂きました。坂崎さんは、植物園を創設された故・郡場寛教授とも直接面識をお持ちだったとのこと。今年89歳の植物園と3つ歳ちがいの坂崎さんの文章を読んでいると、あたかも植物園という存在が自ら私たちに語りかけているかのような錯覚すら覚えます。人間の生には限りがありますが、とりあえず「根本的なことがら」については、世代を越えて課題を共有し、長いタイムスパンで取り組んでいくことが大切なのだと考えたいと思います。

2012年9月10日 大石高典

京大植物園を考える会ニュースレター
 ゆくのき通信 第10号
 発行：2012年9月15日 京大植物園を考える会
 印刷：株式会社北斗プリント社
 事務局：〒606-8799 左京郵便局私書箱5号
 URL: <http://ja3yaq.ampr.org/~bgarden/> (HP アドレスが変わりました)
 E-mail: kyotoubg@gmail.com